

## 大学の入学試験

野瀬 隆平

朝とどいた新聞を開いて行くと、ルーペなしではとても読めそうもない小さな字が並んでいるページが現れた。どうも英語のようだ。

さる国立大学の入試問題である。前々日に行われた二次試験の科目のうち、英語の問題と解答例を載せているのである。

あまりにも英語の活字が小さいので、飛ばして次のページに行こうかと思ったが、どんな問題が最近は出されているのか興味もあり、ルーペの助けを借りながら、読み始めた。

かつて、自分も受けたのと同じような問題形式で、比較的長い英文を読ませて、次の問いに答えよというものが中心である。英文和訳や英作文の他に、我々の時には無かったもので、試験場で放送される英語を聞き取って問いに答えるというのがあった。しかし、これは誌面では再現できないので、当然のことながら省略されていた。

長文の読解で取上げられている文章には、精神分析の創始者であるフロイトに関するものや、日本の「能」に関するものなど多岐にわたっているのが興味深い。どれだけの時間が与えられているのか分からないが、読み込むにはかなり苦労するのではないかと思われた。

試験問題を眺めているうちに、受験当時のことが次々と頭に浮かんできた。やたらと受験科目が多く、例えば文系志望でも理科では物理、化学、生物、地学から二科目を選んで受けなければならなかった。

試験会場の光景は勿論のことながら、今でも記憶に残っているのは、合格発表に関することだ。

合格を自宅に電話で知らせてくれるというサービスがあり、確か予備校に頼んでおいたのだと思うが、その電話がかかってきた。それも発表予定日の前日の夕方だった。自分も大学生になれるとホッとする。だが本当なのか、実際にこの目で確かめたくなり、発表場所に電車で急いで向かう。掲示板に張られた白い用紙の上に自分の受験番号を見つけ、何度も控えに持っていた番号と見比べて間違いないことを確認。心から安堵して自宅に戻った。